Hondaの交通安全情報紙
The Safety Japan
Since 1971
4・5
2010
APRIL・MAY
●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2−1−1
TEL 03(5412)1736
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
●編集人：千葉英雄
※年間購読をご希望の方は、下記までお問合わせください。
㈱アストクリエイティブ　安全運転普及本部係
TEL 03（5439）1191　E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp
SJ-Netは ホンダ　SJ 検索

CONTENTS

特集：子どもへの交通安全教育
子どもの特性を踏まえた教育の重要性……❶
危険予測トレーニング（KYT）／駐車車両の前を横断する（子ども編）……❹
交通安全指導「知っ得」情報／交通安全指導における効果的な話し方…❹
SJクイズ……❹
DOCUMENT EYE ㉓⑥
高速道路のサービスエリアで親子の行動を観察する……❺
地域のチカラ／鹿児島県の交通安全活動……❻
現場訪問／郵便事業（株）……❼
TOPICS①／Honda Cars東京中央野沢店「安全運転講習会」……❼
TOPICS②／鈴鹿サーキット「モートピア」NEWプッチタウン・オープン
TOPICS③／Hondaドライビングシミュレーター・フルモデルチェンジ
教育最前線／熊本県交通安全講習員・電動車いす研修……❽
読者の声……❽

特集：子どもへの交通安全教育

子どもの特性を踏まえた教育の重要性

子どもへの交通安全教育においては、それぞれの年代の特性を踏まえたアプローチが必要となる。今号では、そうした観点からHondaが開発した交通安全教育プログラムや教材を活用し、地域で展開されている子ども向けの教育の現場を紹介。各年代の指導に求められる教育的視点や効果的な指導について探る。

鈴鹿市立国府幼稚園で「Honda交通安全かるた」を活用して行われた交通安全教室

本田技研工業（株）熊本製作所での「大津地区親子交通安全教室」

アクティブセーフティトレーニングパークもてぎでの「親子でバイクを楽しむ会」

磐田市立豊浜小学校で「Honda自転車シミュレーター」を活用した交通安全指導

子どもの交通安全教育に求められる遊び心

鈴鹿市交通教育指導員の近藤麻里さんが最初に取り出したのは、かるたの「み」の絵札（左記参照）。じっくり絵札を子どもたちに見せながら、「道路を渡る前にやらなければいけないことがあったね」と問いかける。子どもたちはいっせいに「右！左！右！」と声をあげる。すかさず近藤さんは、「そうだったね。一旦止まって、右、左、右を見て、クルマが来ていないことを確かめてから、道路を渡りましょう」と指導する。

これは、2月24日に三重県鈴鹿市立国府幼稚園で行われた、園児向けの交通安全教室の1コマだ。このかるたは、ホンダが昨年8月に制作した子ども向けの交通安全教材「ホンダ交通安全かるた」（左記コラム参照）をもとに、集合教育用に大判として作成し、今年4月から販売したもの。今回はその販売に先駆け、国府幼稚園で大判かるたを使った交通安全指導の試行が行われた。

かるたの絵札を使った基本的な交通安全指導が終わると、後半はいよいよかるた取り。23人の子どもたちは4チームに分かれ、各チームから1人ずつ代表が出て、教室の中央に並べられた絵札のまわりに座り、かるた取りに挑む。

今度は指導員の浅野尚子さんが読み札を読み上げ、札をとった園児は前に出て、取った絵札を掲げる。その絵札を浅野さんが指しながら交通安全のポイントを指導。例えば、「チカチカしている信号は、クルマ用の信号の赤・青・黄色の何色と同じ意味かな？」と尋ねると、園児からは、「赤」「青」「黄」とさまざまな意見が出てくる。そこで浅野さんは、「チカチカの信号は、黄色の信号と同じで、『先へ進んではいけない』という意味です。だから、渡る前からチカチカしていたら、渡らないで待ちましょう」と、絵札に合わせた注意点を伝えていく。

この年代の子どもたちには、「止まる」「見る」ことを身につけてもらうことが重要である。動きながら見るよりも、止まって見るほうが、落ち着いて周囲の状況を確認できるからだ。こうしてかるた取りを楽しみながら、「止まる」「見る」といった交通安全の基本を指導する方法は、こうした幼児期の子どもに有効だといえる。国府幼稚園の園児たちはこの日、思いおもいに声をあげながら、身近な交通安全のポイントを学んだ。同園の石田典子園長は、「読み

指導員が絵札を見せて、子どもたちに問いかける

かるた取りで子どもが取った絵札について、指導員が説明

かるたで覚えよう！交通ルール

「Honda交通安全かるた」大判セットを販売！！

「Honda交通安全かるた」は、子どもたちに覚えてほしい交通ルールやマナーを45種類紹介。かるたで遊びながら、親子で「正しい交通行動」や「命の大切さ」について学べるようになっています。家庭用の普通サイズに続き、指導者の皆様からご好評いただいておりました大判セットの販売を開始いたしました。

従来のかるたの絵札45枚が、A4サイズの大判になり、交通安全教室など集合教育の現場で使いやすくなっております。

「Honda交通安全かるた」大判セットの内容
- ●絵札（大判サイズ）45枚
- ●かるたセット（普通サイズ）1セット
- ●教育指導マニュアル　1部

※定価2万円（税込）

ご購入方法等、詳細は以下ホームページを参照。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/karuta/
お問合せ：本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL 03（5412）1736

札がわかりやすく、子どもたちの交通安全のポイントを押さえた内容でよかった。ちょうど仲間意識が芽生え、みんなで何かに取り組むのが楽しい時期ですから、今日はチームで応援合戦を繰り広げながら、楽しく学べたと思います。このように遊び心のある教材は、とてもありがたいですね」と、今回の感想を語っていた。

見て、聞いて、考えて身につく交通安全

同じ年代向けの交通安全教育の事例を、もう一つ紹介しよう。本田技研工業（株）熊本製作所（熊本県大津町）では3月6日、周辺地域の子どもとその保護者を対象に、「大津地区親子交通安全教室」を開催した。春の入学シーズンには、登校に慣れない新小学1年生が事故に巻き込まれる危険が高まるため、小学校入学前の子どもたちを対象に、事故の怖さを安全に体験してもらい、自分の命を守る意識を高めてもらうことが狙いだ。このイベントは毎年3月に開催され、今回で15回目を迎える。

同製作所では、開催にあたって従業員の家族だけでなく、製作所のある大津町と近隣の菊陽町、合志市、西原村など、各自治体の協力を得ながら、幅広い親子に参加を呼びかけた。今回は保護者101人、子ども139人の計240人が参加、熱気あふれる交通安全教室となった。

この日はあいにくの雨天。屋外で予定されていた事故再現などのデモンストレーションは中止となってしまったため、室内で交通安全教育プログラム「あやとりぃ[※1]　ひよこ編」を活用した交通安全指導が行われた。親から子へ、あるいは集合教育を通じて、日常生活のなかでの交通行動の基本を教えることを目指したこのプログラムでは、CDを使って自動車の音や、生活のなかのさまざまな音を聞かせるほか、交通安全に必要なポイントをすべてクイズ形式で考えてもらうなど、子どもが興味を持ち、楽しく学べるように工夫されている。

指導を担当したのは、大津地区交通安全協会・交通安全講習員の桑原洋子さん。

ホンダでは近年、地域の交通安全教育指導者の養成に力を注いでいるが、その一環として同地区の講習員にも「あやとりぃ」の指導ノウハウを提供した。

今回の交通安全教室では、交通安全のポイントを示した「あやとりぃ　ひよこ編」のイラストを、会場のスクリーンに映しながら指導が行なわれた。例えば、道を歩く場所。会場前方のスクリーンには、車道と歩道が分かれていない道路と、そこを往来するクルマや子どものイラストが映し出される。

「こういう場合は、どこを歩けばいいのかな?」と、桑原さんが問いかける。即座に子どもたちから、「右!」と元気な声が上がる。「そう、りかちゃん（道路の右側を歩く女の子のイラスト）がいるほう、右側だよね。では、自分の右手はどちらかわかりますか?　右手を上げてみてください」と、桑原さんは子どもたちに、実際に動作を促しながら指導を進めていく。こうしてわかりやすいイラストを見ながら、子どもたちが交通安全の基本を楽しく学べるように配慮されている点が、「あやとりぃ」の特長だ。

当日はこのほか、シートベルトコンビンサーで5km／hからの衝突を実際に親子で体験し、自動車乗車中のシートベルト着用の重要性を再確認してもらった。4月から小学校に進学する子どもと参加した小此木（おこのぎ）起志江さんは、「これまで幼稚園へは私がクルマで送迎をしていました。4月からはクルマの往来のある通学路を自分の力で通学しなければいけないので心配でしたが、この教室に参加して安心できました。入学直前のタイミングで信号の意味や、道路を横断する時の注意点など、基本的なことを教えてもらえたのがよかった」と、親子交通安全教室の感想を話してくれた。

「あやとりぃ　ひよこ編」を活用して、正しい歩き方を子どもたちに伝える

自転車シミュレーターを活用した教育

同じ子ども向けの交通安全指導でも、小学生になると、より実践的な教育が求められるようになる。この年代になると、友だちと自転車に乗って出かけるなど、行動範囲がさらに広がるため、交通社会のなかでの危険予測能力なども高めていく必要がある。

ホンダでは、そうした危険を安全に体験する実践的な教育を効果的に行うために、「ホンダ自転車シミュレーター（以下、シミュレーター）」[※2]を開発、今年2月より発売を開始している。合わせてシミュレーターを使った教育プログラムも整え、小・中・高校生や高齢者向けの交通安全教育の現場で活用いただいている。

3月2日、静岡県磐田市立豊浜小学校では、このシミュレーターを活用した交通安全指導が行なわれた。背景には、同校では小学1年生でも、帰宅後や休日は、保護者の判断で自転車の利用を認めているため、多くの児童がすでに自転車に乗り始めているという実態がある。

今回の指導は、磐田警察署交通安全指導員の秋元智佳子さんが担当。最初に自転車利用に関わる基本的な指導が行なわれた。スクリーンにイラストを映しながら、自転車の安全な乗り方、歩道を走行する時の注意点、道路を渡る時のルールなどを、一つずつ丁寧に指導していく。

続いて、いよいよシミュレーターを使った指導が始まる。最初は担任の先生がシミュレーターに乗り、危ない乗り方を実演。子どもたちは口々に、「わー、危ない!」「だめだよ」などとつぶやきながら、担任の宮沢知子先生の様子を見守る。一見、ただのデモンストレーションのようだが、このシミュレーターの威力はここから発揮される。シミュレーターには振り返り機能があり、今見たばかりの走行状況を再生しながら、どこが悪かったのか、どのようにするべきだったのかを確認できるのだ。

例えば、交差点に差しかかったところで画像を停止。秋元さんはここで、「この交差点では『止まれ』の標識がありませんね。だけど、左からクルマが来ているのが見えたかな?だから標識がなくても、交差点ではいつでも止まれるようにスピードを落とし、よく確認しましょう」と説明する。

さらにこのシミュレーターには、同じ場面を自転車利用者の側からだけでなく、別の視点、例えばドライバーの視点から確認する機能も付いている。秋元さんはこの機能を用いて、「運転手さんからは、自転車がどう見えたのか、確認してみましょう」と、ドライバー視点からの映像を再生。「運転手さんからは、宮沢先生の姿が見えないね」と、自転車が木に隠れて見えなくなる場面で映像を止める。こうしてリアルな動画を見ながら、死角の確認などを行うことで、子どもたちも納得しながら、自転車の安全な乗り方を身に付けられるのだ。

ひと通り指導が終わると、今度は子どもたちの代表が、シミュレーターを体験。画面の状況に合わせ、「わあ、クルマが来た」などと歓声を上げながら、場面に応じて実践的なアドバイスを受ける。終了後、同校の安藤隆敏校長は、「最新の技術を使って指導してもらえたので、非常にわかりやすかった。子どもたちは、お題目のように交通ルールはいえるけど、なかなか行動に結びつかない。今日は言葉だけでなく、シミュレーターを使って実践的な指導が受けられたので、子どもたちの理解も深まったと思います」と語っていた。

親子の絆を深めながら、ルールの大切さを学ぶ

ホンダの交通教育センター（もてぎ、埼玉、浜名湖、鈴鹿、熊本）では小学生とその親を対象に、バイクを運転する体験を親子で共有することで、交通安全の基本を学び、親子の絆を深めてもらうことを目的と

シミュレーター上の見通しの悪い交差点で左右確認を行う児童

シミュレーターの振り返り機能を使って、指導員が児童にアドバイスを行う

※1　あやとりぃ＝本田技研工業（株）安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックが鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。小学3・4年生向けの「あやとりぃ」、幼児向けの「あやとりぃ ひよこ編」、小学生向けの「あやとりぃ 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者向け「あやとりぃ 長寿編」がある。あやとりぃは「**あ**んぜんを　**や**さしく　**と**きあかし　**り**かいして　**い**ただく」の略。詳細は右記ホームページを参照。　http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/

特集：子どもへの交通安全教育 ―子どもの特性を踏まえた教育の重要性

したスクール「親子でバイクを楽しむ会」を開催している。このスクールは、お父さんやお母さんが先生役となり、子どもたちにバイクの操作方法から、ルールやマナーの大切さを伝える。

このスクールが3月13日、アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ（栃木県茂木町）で開催され、4組の親子が参加した。

「今日はみなさんのお父さん、お母さんが先生です。先生の言うことを守ってください。そして、バイクを運転する時の決まりがあります。決められた服装と用具をきちんと身につけて運転しましょう」と、指導を担当する鈴木正司インストラクターが受講中のルールを話す。バイクは初めてという子どもたちが、最初にアクセルや前後ブレーキなど、バイクの各部の役割や操作を学んだ後、実際にバイクに乗車して運転を学んだ。

練習を終えた子どもたちからは「最初は不安だったけれど、がんばって運転できるようになって、うれしい」という声が聞かれた。

小学2年生の子どもと参加した栗田真さんは、こうした試みの意義について、「子どもが私のアドバイスを素直に聞いて、自分で課題を修正しながら、上達していく様子を見て感動しました。このスクールの経験を通じて、ルールを守らないと危ない目にあったり、人に迷惑をかけてしまうことを、子どもなりにわかってくれたと思います」と語った。

「親子でバイクを楽しむ会」では、お父さんが先生役になってバイクの安全運転を教える

子どもの心理と身体の発達特性に合わせた教育を

以上のようにホンダでは、子ども向けのさまざまな教育ソフトの開発、交通安全教室などのイベントやスクールを展開している。さらに、イベントを主催するだけでなく、地域で交通安全教育ができる指導者の養成を進めるなど、交通安全教育の裾野を広げるための取組みを推進している。

しかし、一口に子どもの交通安全教育といっても、それが子どもの成長段階に適したものでないと効果を発揮しないことは、冒頭で述べた通りである。では、そもそも子どもの心理特性とはどのようなものなのか。また発達心理学的な観点から見ると、子ども向けの交通安全教育では、どのような配慮が必要になるのか。発達心理学が専門の小野寺敦子・日白大学人間学部心理カウンセリング学科教授にお話をうかがった。

「心理学では、人間は幼児期から児童期、青年期、成人期、高齢期に至るまで、生涯にわたって成長していくものであり、それぞれの年代の心理特性に合った交通安全教育が求められると考えています。子どもへの交通安全教育でも、それが子どもの特性にあったものかどうか、よく見きわめて実施する必要があると思います」。

小野寺教授によると、子どもが自分を徐々に認識し始めるのは、1歳を過ぎたあたりから。それがある程度確立され、自我が芽生えてくるのが3歳前後からで、この年代から5～6歳くらいまでは、「自己中心性の時代」として特徴づけられるという。

「この時期の子どもは、自分の視点でしか物事を見ることができません。例えば、お母さんが道路の反対側にいて、それを見つけた子どもが急に飛び出したりするのは、この年代の子にそうした心理特性があるからです。要するに、交通状況を自分の視点から見ることができても、他者から自分がどう見えるかを想像したり、次にどうなるかを予測する能力がない。ですから、この年代の交通安全教育では、まず『止まる』『見る』といった基本動作を教え、自分の感情をコントロールできるように教育していくことが大切です」。

では、その上の小学生年代になると、子どもの心理特性はどう変わるのか。小野寺教授によれば、心理学用語でいう『超自我（スーパーエゴ）』が芽生えるのが、だいたい6歳以降から。この年代の子どもは、自分の存在を超えた社会のルールがあることを、徐々に理解し始めるのだという。これは交通社会でいえば、誰もが守るべき交通ルールがあって、そのルールを維持することで社会が成り立っていることを、子どもながらに徐々に理解できるようになるということだ。

「ですから、交通ルールを本格的に学べるのは、実際にはこの年代からでしょう。また、この年頃になると、先ほどいった他者視点から物事を見る能力もついてきますから、危険予測なども行えるようになります。その点で、ホンダが開発した『あやとりぃ』や自転車シミュレーターのように、イラストや動画などを用いて交通ルールの基本を学んだり、危険予測能力を養うアプローチは、大変よいものだと思います」。

一方、身体特性の面で小野寺教授が危惧しているのは最近、足の土踏まずが未形成の子どもが増えていることだ。「土踏まずは1歳半から3歳半にかけて形成され、立っている時のバランスを保つ機能があります。これが未形成ということは、今の子どもたちは歩いている途中で、きちんと止まることが苦手になっているということです」。

目白大学教授・小野寺敦子さん

もう一つ、小野寺教授が強調したことがある。それは子どもの教育では、当の子どもだけでなく、大人にも学ぶべき点があるということだ。「教育の現場では、子どもたちの心理特性、身体特性を十分に理解せず、大人の目線で学ばせる、いわゆる『しつける』という、一方的な教育に陥りがちです。しかし、そうした教え方はそろそろ見直す時期にきていると思います。まずは大人が、子どもの特性をきちんと知る必要があって、それをきちんと理解した上で、子どもの教育を考える必要があります」。

今はそうしたことを、大人がきちんと学ぶ機会が少ないのではないかと、小野寺教授は指摘する。交通安全教育の現場でも、今後はそうした観点も取り入れていく必要があるといえる。

これから幅広い地域において、次世代を担う子どもたちのための交通安全教育を、ますます活性化させていく必要がある。子どもたちが今後、よりよい交通社会人として成長できるように、大人は子どもの特性を見きわめながら、なるべく多くの教育機会を設け、効果的な指導のあり方を模索していかなければならない。

NEW 「新 あやとりぃ ひよこ編」誕生!

Hondaは、常日頃から子どもたちに接する機会の多い、保育園・幼稚園の先生方や地域の交通指導者が、自らの手で交通安全を繰り返し教え広めていくことが重要と考え、未就学児童（4～5歳）を主な対象とした従来の交通安全教育プログラム「あやとりぃ ひよこ編」を現場の実情にあわせ再編した。「新 あやとりぃ ひよこ編」として今年度より広く展開していく。

教材内容

- ●未就学児童の特性、理解力に合わせた「大型ワークシート」を作成
- ●子どもたち自らが選択し、大型ワークシートに貼り付け回答できる、「キャラクター・クルマ・信号機」を作成
- ●保育園・幼稚園の先生方自らが交通安全指導できる「マニュアル（台本）」を用意
- ●子どもたちに「止まる」「見る」ことを身につけさせるために、繰り返し指導が行える「一時停止ステッカー」を用意

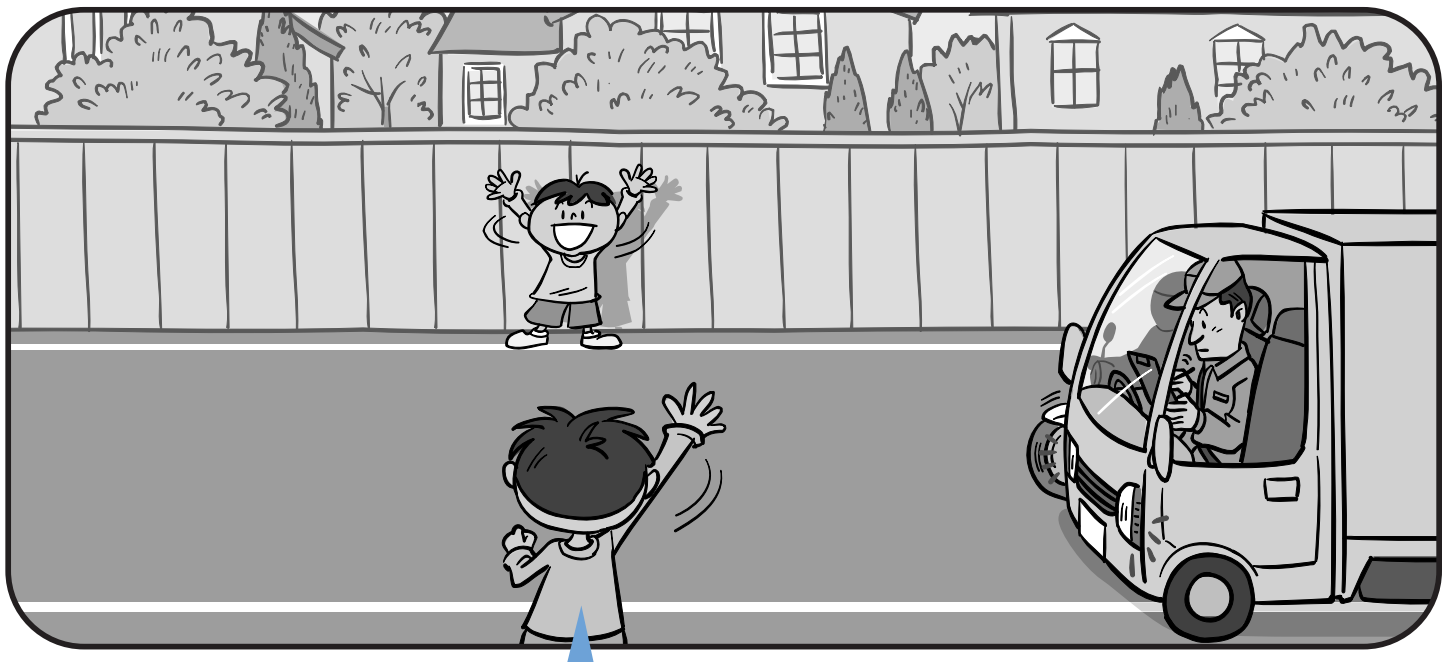
一時停止ステッカー

※保育園・幼稚園の先生方や地域の交通指導員等、自らで交通安全教育を実践いただける方には、指導者養成と併せ教材の貸し出しを行う予定。
お問合せ：本田技研工業（株）安全運転普及本部　担当：山田
TEL03(5412)1736

※2　Honda自転車シミュレーター＝自転車利用者のマナーや危険予測能力を高めることを目的に、Hondaが開発した体験型教育機器。詳細は右記ホームページを参照。http://www.honda.co.jp/simulator/bicycle/
お問合せ：本田技研工業（株）安全運転普及本部　教育機器課　TEL048（452）0559

危険予測トレーニング（KYT）――危険感受性を育てる　第⑭回　駐車車両の前を横断する（子ども編）

交通事故を防止するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を育てるための題材を提供します。今回は子ども（小学生以上）に、道路の横断時に注意することを考えてもらうためのKYTです。



あなたは向こう側にいる友だちのところに行くために道を渡ろうとしています。
あなたの右にいるトラックは止まっています。

安全に道を渡るためには、どんなことに気をつければ良いか考えてみましょう。

©本田技研工業（株）

活用方法

❶イラストを見せて、子どもに場面状況を説明してください。
❷イラストの中のどこに危険があるか、子どもの意見を聞いてください。
❸その後、「解説※」を参考にして、道路を横断する時に注意すべきことについて再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト（カラー・A4版）」は下記SJ-Netでご覧いただけます。

ホンダ　SJ　検索

【使用上の注意】
●営利目的での利用はおやめください。
●内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
●その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。

本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL：03（5412）1736
E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

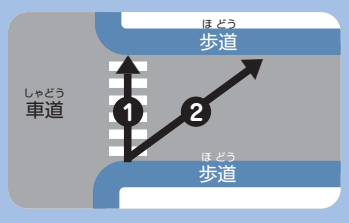
SJクイズ　子ども編

Q1 横断歩道を渡ろうと歩行者用の信号を見たら、青がチカチカしていました。この時に、正しいのはどれでしょう？

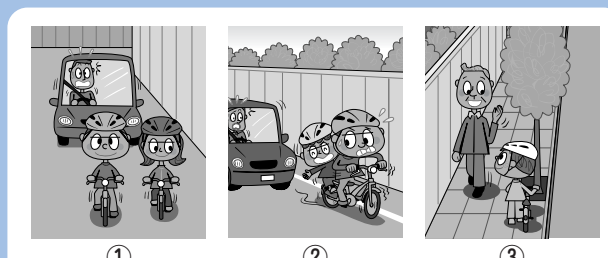
①走って渡る　②クルマに注意して渡る
③止まって次の青まで待つ

Q2 道路を渡る時、まっすぐに渡る場合と、ななめに渡る場合では、どちらが道路の反対側に早く着くことができるでしょう？（どちらの場合も歩く速さは同じとします）

①まっすぐに渡る
②ななめに渡る



Q3 次のイラストの中で、やってはいけないことをしているのはどれでしょう？（いくつでも可）



①　②　③

※「解答」は7面下。「解説」は下記SJ-Netでご覧いただけます。

ホンダ　SJ　検索

交通安全指導 知っ得情報

このコーナーでは、交通安全指導に関わっている方々に役立つ情報を提供しています。

交通安全指導における効果的な話し方　第1回

藤原徳子（株）ビジネスファーム　代表取締役
平成19～21年度の内閣府主催「交通安全指導者養成講座」で講師を務めるなど、コンサルティング会社でのキャリアを活かし、自治体や企業向けの研修や講演会等で活躍。

指導者としての心構え

交通安全指導はルールを守ることの大切さを教えることですから、その指導者は道徳的な人間のロールモデル（お手本）であるべきです。例えば、あなた自身が道路を横断しようとした時、青信号が点滅していたら、ルール通りに止まってください。もしも渡ってしまって、それをあなたが指導した人が見かけたとしたら、その人はどう思うでしょう…。日頃から、教育者であるという自覚を持っておくことが重要です。

話をする時に効果的な動作

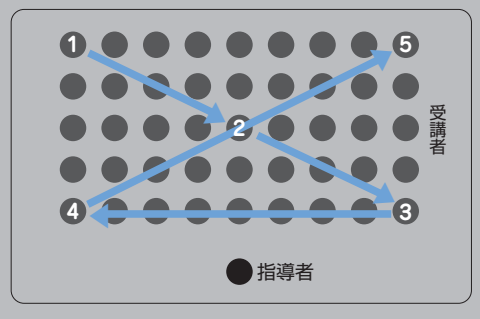
交通安全指導の場面では集団に向かって話すことが多いと思います。この時、指導者の皆様に意識してほしいのは、受講している方々の存在を常に認知すること。こうした場合に役に立つのが視点法（右図）です。

人間は自分の存在を認知されることで癒されます。そのため、話をする時は視線を移動させて会場全体に目を配りましょう。視線を送る時は受講者の眼球を見るのではなく、目頭と目頭の間くらいを見ることがポイント。こうした工夫で、受講者が参加しているという意識も高まります。また、この視点法は自信を持って話しているイメージを演出するという効果もあります。

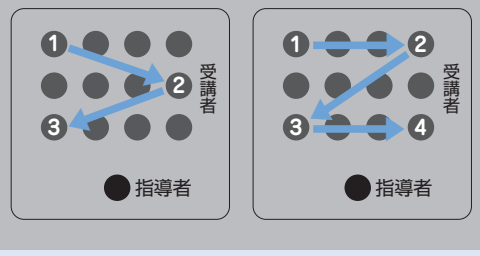
視点法の例

話をしている時に下記の矢印に合わせて視線の移動を繰り返す。

参加者が多い場合（会場が広い場合）
＜5点法＞



参加者が少ない場合（会場が狭い場合）
＜3点法＞　＜Z視点法＞



◎次号では具体的な話し方のスキルについて、ご紹介する予定です。

混合交通を観察する
DOCUMENT EYE ●series—236

高速道路のサービスエリアで親子の行動を観察する

SJ-Netで
今回観察した際の
動画を公開中です。
ホンダ　SJ　検索

ある日の午前中、気になる実際の交通状況を観察してみました

親は駐車場で子どもの安全を守っているか？

サービスエリアの駐車場で店舗側に走り出す子ども

駐車場でひとり歩きする子どもたち

子どもの降車を手助けする親

Q1 親より先に、クルマから降りた13歳未満の子どもは何%いたでしょうか？

※今回の観察は13歳未満の子ども（小学生以下）を対象とした。
年齢の判断は観察者の見解による

- ●観察場所／神奈川県海老名市　東名高速道路下り線「海老名サービスエリア」
- ●観察日／3月20日（土曜日）
- ●天候／晴れ
- ●観察時間／10:40～12:40
- ●観察者／4名

Q2 駐車場でひとり歩きする13歳未満の子どもは何%いたでしょうか？

Q3 駐車車両の間をすり抜けて、店舗まで移動する親子がいました。駐車場では、親は、どんなことに注意して子どもと移動すればよいでしょうか？

こんな事故が起きています

事故にあった子どもは、違反ありの割合が高い

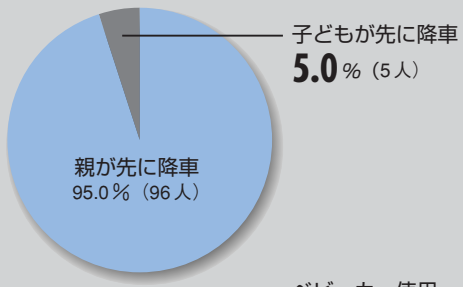
平成21年に歩行中に事故にあった子ども（15歳以下）は12,891人（第1・2当事者）。その内、違反のあった子どもが約3分の2の8,515人で、他の年齢層に比べ違反ありの割合が高い。子どもの違反で最も多かったのが飛び出しで、4533人と過半数を占め、次いで横断違反2194人（横断歩道外782人、走行車両の直前後611人、駐車車両の直前後532人など）、幼児ひとり歩き494人となっている。（警察庁資料）

解答・解説

実際の観察から

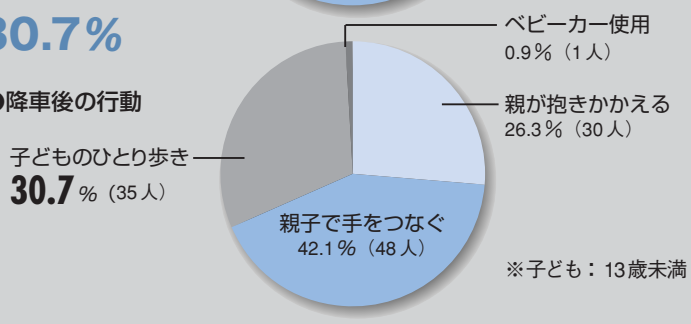
Q1の解答：5.0％

●降車時の行動



Q2の解答：30.7％

●降車後の行動



※子ども：13歳未満

【親子の様子】

- ●ほとんどの親子連れが、親が先に降車し、子どもの降車の手助けや確認をしていた。停車後すぐに、子どもがドアを開けて先に降車する例もあった。
- ●駐車スペースではない通路で停車し、子どもを降車させる親子もいた。
- ●クルマから荷物を降ろす時などは、子どもから意識が離れてしまうようで、その間に子どもがクルマのまわりで動き回る様子が見られた。
- ●移動の際には、小さな子どもほど親が安全を守り、手をつないだり抱きかかえるなどの姿が多かった。しかし、中には6歳未満の幼児のひとり歩きも9名観察された。子どもが先頭で駐車車両の間をすり抜け、確認せずに飛び出す例もあった。また、子どもが急に駆け出して、「危ない」「待って」などと親が声をかける様子も見られた。
- ●休憩を終えクルマに戻る際には、注意力が欠如してしまうようで、親の両手が買った商品で埋まり、子どものひとり歩きが増え、安全を確認せず飛び出してしまう子どもが目立った。

親より先に降車する子ども

【クルマの様子】

- ●高速で運転し続けた直後に、サービスエリアに入って、緊張感がとぎれてしまうのか、注意力が散漫になっていると思われるドライバーもいた。
- ●駐車スペースを探すことに意識が向き、急にクルマの陰から出てくる歩行者にドライバーが慌てる様子も見られた。また、急にバックしたり、通路での徐行が不十分なクルマもあった。

Q3の解答：

- ・子どもと手をつなぎ、子どもの飛び出しなどに注意する。
- ・ドライバーの死角になるべく入らないように注意する。
- ・駐車車両の急なドア開きに注意する。
- ・クルマの陰から出る際は、必ず止まって左右の安全を確認する。

手をつないで、駐車場内の横断歩道を利用する家族連れ

ここがポイント

- ●降車時は、大人が先で、子どもが後で。
- ●乗車時は、子どもが先で、大人が後で。
- ●サービスエリアでは、子どもと手をつなぐなど、子どもの安全を確保する。
- ●サービスエリアは、ドライバーの意識が駐車スペースに向くなど、歩行者の動きを見落としやすくなる。積極的に安全確認を行い、無理な横断や飛び出しはしない。
- ●クルマに戻る際にも、気を抜かず、クルマに十分注意する。

ワンポイントDATA

サービスエリアなどの駐車場での死亡事故も起きています

2002～06年の、低速域歩行者死亡事故をみると、衝突速度が、10km/h以下の死亡事故の約7％が、一般交通の場所、すなわち、大きな駐車場や高速道路のサービスエリア、パーキングエリアなどで発生している。

また、0～5歳幼児の死亡事故の約50％が衝突速度20km/h以下の低速事故となっている。幼児は、駐車場などクルマの速度が低い場所でも、十分な注意が必要だ。（（財）交通事故総合分析センター資料）

©本田技研工業（株）

★SJ-Netにて本紙では紹介していない観察状況と動画がご覧いただけます。ホンダ　SJ　検索

地域のチカラ ●鹿児島県の交通安全活動

中高生の交通事故削減に向け、各所が連携した地道な活動を展開

鹿児島県は、県、警察、学校、自動車学校等関係機関・団体、地域が一体となり、中高生の交通事故防止に積極的に取り組んでいる。高校で実施される『単車技能講習会』や、街頭で見かける『交通マナーアップ指導員』など、連携を生かした地道な活動で、着実に交通事故削減につなげている。

県教育委員会保健体育課の竹之下浩徳指導主事は、「鹿児島県では、公共交通機関だけでは生徒の通学に支障が出る地域も多く、自転車や原付による通学を認める学校がほとんどです。そのため、中学、高校段階で通学実態に応じた指導を行い、交通ルールやマナーを伝えていくことが必要となります。今後交通社会で生きていく上で必要な知識を、学生時代にしっかりと身につけてほしいと考えています」と話す。

大口高校で平成20年に実施された『二輪通学許可校支援研修会』の模様。生徒の実技研修の他、県内の担当教諭の研修が行われた。同様に、全通学許可校において実技を交えた『単車技能講習会』が実施される

原付通学者へ実技を交えた講習会の実施

鹿児島県では、県立高校の生徒約5千人が原付（二輪）で通学している。これは、全生徒数の約15%にあたり、県立高校70校中、56校（鹿児島市内を除く県内のほぼすべて）が、原付通学を認めている。

そのため、全ての二輪通学許可校で、近隣警察署・自動車学校の協力の下『単車技能講習会』を実施し、原付通学者は実技指導を受ける。

また、平成17・19・20・21年度には、（財）日本交通安全教育普及協会が主催する『二輪通学許可校支援研修会』が県内の高校で実施された。この研修の目的について、竹之下さんは「毎年の単車技能講習会の中で、生徒自身に危険を考えさせる指導が重要という指摘を（財）日本交通安全教育普及協会からいただき、実際に生徒への研修会を実践していただきました。また、同時に、県内各通学許可校の交通安全指導担当教諭も参加して、指導法を学びました」と語る。

生徒の意識を変える交通安全指導

平成20年の『二輪通学許可校支援研修会』は、鹿児島県立大口高等学校（鹿児島県伊佐市）で実施された。同校の脇久美子教諭は、研修の内容について「衝突実験を行う前に、もし自分が一時停止をせずに交差点に飛び出したらどうなるかを生徒に考えさせました。生徒が事故の怖さを疑似体験し、自分の運転技術や危機意識を見直すなど、生徒が感じることの多い研修会だった」と振り返る。

同校では、他にも年間を通して様々な交通安全活動に取り組み、交通講話や車両点検の実施、生徒の交通安全標語コンクール、文化祭での交通に関するモニュメント等の展示発表を行った。さらに、生徒が中心となり「伊佐人の波作戦」「伊佐新米ネギらい作戦」と称して街頭で交通安全標語を載せた手作りのしおりや新米などを配り交通安全を呼びかける啓発運動、ひやりマップや交通安全カレンダーの作成、PTA等の協力による交通安全看板・プレートの設置なども実施。「生徒主体の活動や、地域・家庭の協力を得たことで、安全意識が向上してきているように感じます」と脇さんは、取組みの成果を実感している。

大口高校の生徒が主体となって交通安全を呼びかける「伊佐新米ネギらい作戦」

PTA等の協力による交通安全看板・プレート

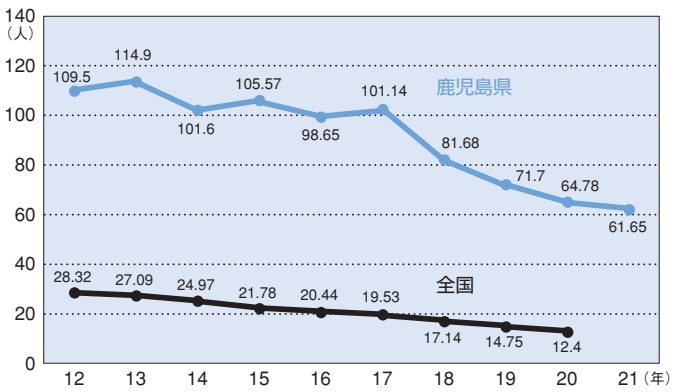
文化祭での交通安全展示

原付事故の減少

鹿児島県の高校生1万人当たりの原付乗用中死傷者数をみると、平成17年の101・14人に比べ、平成21年は61・65人と大きく減少した。『単車技能講習会』『二輪通学許可校支援研修会』の実施など、教育現場の取組みの成果が事故減少に大きな役割を果たしているといえる。

しかし、鹿児島県は原付通学者が多いとはいえ、1万人当たり61・65人という死傷者数は全国平均よりまだ高い状況にある。そこで県教育委員会では、さらなる事故削減に向け、昨年の11月から『交通マナーアップ指導員』活動を新たにスタートさせた。

●高校生1万人当たりの原付乗用中死傷者数（鹿児島県）



※（財）日本交通安全教育普及協会資料

中高生への街頭指導や通学路の危険箇所点検を強化

『交通マナーアップ指導員』は、県内中学校136校と高校70校で、中高生の登下校時の交通安全指導や、校区内の危険箇所をチェックする活動を行っている。平成21年度『中・高校生交通マナーアップ委託事業』は、国の緊急雇用創出事業として実施されており、ハローワークを通じて26～71歳の50名が採用され活躍している。

事業を委託されていた鹿児島県綜合警備保障（株）では、月1回の勉強会や活動地域での巡回指導を行い、指導員の資質向上に努めた。同社特別業務事業部主任の生野忠貴さんは「指導員は、子どもたちに直接声かけ指導をするだけでなく、気になる点は学校側に必ず報告し、必要のある場合は、学校側から働きかけていただくようにしています。子どもたちの安全確保だけでなく、交通マナーの向上や防犯面での効果があげられるよう、指導員はやりがいを持って取り組んでいます」と話す。

交通事故負傷者数は、この事業を開始した11月以降減少し、2月末現在で35人減とさらに、事故減少に寄与している。

中高生の登下校時に街頭で活動する『交通マナーアップ指導員』

現場訪問――●郵便事業（株）

安全最優先の集配業務を徹底するための指導者づくり

郵便事業（株）は年間250億通にのぼる郵便物の配達を担い、全国に郵便サービスを提供する会社である。同社は全国に1091の支店があり、配達など集配業務のために9万台のバイクを活用している。そのため、集配業務を担当する社員の交通事故防止に積極的に取り組んでいる。

「私たちは日々、国民の財産である道路を利用して、郵便物をお客様にお届けしています。『防衛運転の励行で安全最優先の集配業務を徹底しよう！』をスローガンに掲げ、事故防止は重要な課題としてとらえています」と、同社コンプライアンス部門安全推進部交通安全担当係長の磯崎征司さんは話す。

郵便事業（株）コンプライアンス部門安全推進部交通安全担当係長・磯崎征司さん

同社では集配を担当する期間雇用社員には配属前に、全国47箇所のトレーニングセンターと呼ばれる施設で3日間、バイクの運転を指導している。このトレーニングセンターの指導者104名を対象にした「安全運転指導者スキルアップ研修会」を今年1月、ホンダの交通教育センターで実施した。

「期間雇用社員には、トレーニングセンターで研修を受ける最初の段階で、正しいバイクの運転を伝えることが大切です。そのため、トレーニングセンターの指導者が『正しい運転とは何か』を再確認しておく必要があると考え、鈴鹿サーキット交通教育センターと協力して研修内容を作成しました」と磯崎さんはいう。

さらに入社時だけでなく、各支店が継続的に安全運転指導ができる体制づくりを進めている。3月からは各支店のリーダークラスの社員にも同様の研修会を開始。3月17、18日には、郵便事業（株）東海支社が鈴鹿サーキット交通教育センターで研修会を開催した。

受講者は1日目に、運行前の日常点検、正しい乗降車の仕方と運転姿勢などを学び、制動や一本橋（低速バランス）、パイロンスラロームといった課題に取り組んだ。2日目は受講者が指導者役となって、具体的な指導方法を身につける。交通教育センターのインストラクターが新人役になり、バイクで走行。インストラクターは、わざと不適切な運転をする。それを見た受講者は問題点を指摘し、アドバイスを行う。そして、相手にわかりやすく伝えるためにはどのようにアドバイスすべきか、インストラクターが解説した。

「インストラクターが一方的に教えるだけでなく、受講者が指導者の立場で考えながら学べる点が効果的だと思います」と磯崎さんはホンダの交通教育センターでの研修会を評価する。「安全運転の基本となる知識や技術だけでなく、それがなぜ必要なのかも教えてもらえます。こうした点も受講者が実際に指導する場面で役立つはずです」。

この研修会は4月以降も、もてぎ、埼玉、鈴鹿、熊本など、ホンダの交通教育センターでの開催を計画している。

新人役となったインストラクターの運転を受講者が評価して、不適切な箇所を改善するためのアドバイスをする

実技では見通しの悪い交差点など、注意箇所の走行方法を確認

「指導者は信念を持って安全を伝えてほしい」とインストラクターは受講者に伝えた

TOPICS

1 ●ホンダカーズ東京中央野沢店「安全運転講習会」

お客様にクルマや自転車の安全走行を伝える

2月20日、ホンダカーズ東京中央野沢店にて、お客様を対象とした「安全運転講習会」が開催され、約20名のお客様が参加した。

最初は、応急パンク修理キットの使い方実演。最近は、スペアタイヤに代わり、環境に配慮して重量の軽いキットがクルマに装備されるケースがある。参加者は、キットを使う際の注意点などを積極的に質問しながら学んだ。スタッフからは、「日頃から空気圧やタイヤの傷等をチェックし適正な状態を保つことで、事故防止やエコドライブにも効果的です。キットは、クルマを安全な場所に停車させて使ってください。釘などが刺さった場合には、抜かずにそのままお近くのホンダ販売店に持ち込んでも大丈夫です」などと説明を行った。

続いては、エコドライブについて。エコドライブは安全運転にも効果があることをスタッフが説明。参加者は、店内に設置されたホンダセーフティナビ※を使って、自分の運転がエコドライブかどうか、エコドライブ診断にチャレンジした。

また、店舗内には、ホンダ自転車シミュレーターも設置されており、参加者は歩道の走行や後方確認など、クルマとは違った自転車のルールやマナーをシミュレーターで確認した。

講習会に参加した宝田淳、久実子夫妻は「クルマはもちろん、自転車も街中を走る上では気をつけなければいけない点が多いことを再確認しました」と感想を語った。

同店店長の奥山直樹さんは「クルマと自転車では安全運転のポイントが異なる点がありますので、今日は両方の安全をテーマにしました。どちらの運転をする場合も、お互いの存在を意識して、お客様の安全につなげてほしい」と語った。

応急パンク修理キットの使い方を実演

Hondaセーフティナビを使ったエコドライブ診断

Honda自転車シミュレーターを使って自転車のルールやマナーを確認

※Hondaセーフティナビ＝「環境」と「安全」にやさしい運転を楽しく学習するための安全運転教育用ソフト。詳しくは以下ホームページを参照。http://www.honda.co.jp/simulator/safetynavi/

2 ●鈴鹿サーキット「モートピア」NEWプッチタウン・オープン

遊びながら交通安全に関心を持てる遊園地

鈴鹿サーキットの遊園地「モートピア」内に、3月6日、NEWプッチタウンがオープンした。コチラのプッチタウンは2000年の誕生以来、〝子どもが主役〟をコンセプトに「自分の意志で遊びを創造する」という鈴鹿サーキットオリジナルのモビリティタウンとして、多くのお客様に親しまれてきた。

満10年目を迎える今年、自ら操る楽しさ〝子どもが主役〟はそのままに『親子で協力するともっと楽しくなる』エリアに進化した。

楽しく交通ルールが身につくアトラクション「コチラドライビングスクール」

NEWプッチタウンでは、遊びながら知らず知らずのうちに交通安全に対するルールやマナーが身につくように工夫された「コチラドライビングスクール」、モータースポーツの世界最高峰レースF1（フォーミュラ・ワン）などを開催する鈴鹿サーキット・レーシングコースの魅力と要素を取り入れた「プッチグランプリ」など、鈴鹿サーキットの遊園地ならではのアトラクションが満載となっている。「コチラドライビングスクール」は、教習車に乗って信号や標識を守ったり、思いやりの運転をすることでポイントを獲得していくアトラクション。一緒に乗る親が教習所の先生になって、交通安全を伝えるというもの。合計ポイントによって、普通、ゴールド、プラチナ免許証が発行され、楽しく遊びながら交通ルールを身につけることができる。

（株）モビリティランド テックプロ所長・山上敏樹さん

「モートピア」を研究開発している（株）モビリティランド テックプロ所長の山上敏樹さんは「子どもの健全な成長には『自発性』『創造性』『社会性』が不可欠です。それらを身につけるためには、『感じる（体感）』『競う（競走）』『真似る（模倣）』『作る（創造）』という、子どもが夢中になる要素が必要と考えています。NEWプッチタウンは、この4つの要素を盛り込み、将来を担う子どもにモビリティへの興味を醸成する、交通社会への順応性を育成する、モビリティを通した子どもの自立に寄与する役割を担っています。子どもが主役。そして、親子や家族で協力しあえばもっと楽しい遊園地です」と話す。

「プッチグランプリ」はミニサーキットコースでモータースポーツの魅力を味わえる

※NEWプッチタウンの詳細は以下ホームページを参照。http://www.suzukacircuit.jp/puttitown_s/

3 ●Hondaドライビングシミュレーター・フルモデルチェンジ

指導員から受講者へ充実したアドバイスを実現する進化したHondaドライビングシミュレーター

ホンダは、安全運転教育用四輪ドライビングシミュレーターをフルモデルチェンジし、3月2日から発売を開始した。

ホンダドライビングシミュレーターは、ホンダが長年培った安全運転のノウハウを活かし、実際の交通状況を想定しながら危険を安全に体験できる安全運転教育機器として開発。2001年の発売以来、国内外の教習所などで危険予測の能力や安全意識の向上に役立つ機器として高い評価を得ている。

新型のドライビングシミュレーターは、危険に対する認知力や理解力をさらに高めていただけるよう、運転中に起こる可能性が高い危険場面での注意点や安全運転のアドバイスを、画像や文字でわかりやすく解説する「危険場面解説機能」などを新たに追加した。これにより、指導員のよりきめ細かく、的確な指導を実現する。また、高画質な液晶ディスプレイを採用することで、より実際に近い運転感覚の体験が可能になった。

「危険場面解説機能」画面

フルモデルチェンジしたHondaドライビングシミュレーター

●お問合せ：本田技研工業（株）安全運転普及本部 教育機器課　担当：太田　TEL 048(452)0559

（SJクイズの解答：Q1③、Q2①、Q3①と②）

教育最前線 連載17

●熊本県交通安全講習員・電動車いす研修

様々な走行状況を体験してもらいながら、電動車いすの指導法を伝える

3月12日と16日、交通教育センターレインボー熊本において、熊本県内で交通安全活動を行っている交通安全講習員（以下、講習員）を対象とした、電動車いすの指導者研修が行われた。電動車いすの利用は近年、都市部から農村部まで広がっている。しかし、講習員も実際の走行体験をもたない人が多く、熊本県でも指導者養成のニーズが高まっていた。

インストラクターが高齢者にわかりやすい説明の仕方などを講習員に伝えた

そこで、講習員が自ら正しい基本操作を身につけ、利用者への指導法を学ぶために、県内初で本格的な研修会を実施。当日はホンダのインストラクターが指導にあたり、県内各地区から集まった10人の講習員が、電動車いすの知識と基本操作、指導法を学んだ。

ポイント① 電動車いすの基本を学ぶ

まずは座学からスタート。車両構造や道路交通法上の位置づけ、正しい操作方法など、電動車いすの基礎知識を学んだ。また、電動車いすの事故が、全国で年間200件以上発生している事故実態にふれ、インストラクターが事故事例（イラスト）を見せながら、「道路横断中」「歩道走行中」「坂道」などでの危険回避の方法を説明した。

さらに、「相手を高齢者呼ばわりしない」「説明はゆっくり、わかりやすい表現で」といった、説明する際の注意点もアドバイス。さらにインストラクターは、「一方的に教えず、常に利用者の立場に立って、一緒に物事を考える姿勢が大切です」と、高齢者指導の心構えを語った。

ポイント② ロールプレイで指導のポイントをつかむ

次は実技の基本編。講習員は電動車いすを操作しながら、乗車前点検、発進・停止、旋回、障害物の迂回法などを学んだ。ここでは、講習員同士がペアになり、指導者役と受講者役のロールプレイを行いながら、進められる。例えば乗車前点検でも、交互にパートナーの点検状況をチェックし、間違ったらその場で指摘。正しい方法をわかりやすく、相手が納得できるまで指導する訓練が行われた。

講習員からは、「ロールプレイを繰り返すことで、指導のポイントがつかめたのがよかった。自分で操作できても、きちんと指導するには別のスキルがいることが、よくわかった」といった声が聞かれた。

ポイント③ 危険な状況を安全に体験してもらう

午後からは、実技の応用編。道路環境を模したコース走行や、道路横断などの訓練が繰り返し行われた。また、急な坂道や、見通しの悪い交差点の通過など、危険がともなう場所（状況）の走行も体験。さらに指導者の立場として、何が危険か身をもって知ってもらうために、あえて段差を高速で通過したり、車両が自然に後退しがちな坂道発進も体験するという課題も組み込まれた。

研修終了後、参加した講習員は「どのような状況が危険か、よくわかった。これで自分が指導する時、自信をもって説明できる」「今回の研修は、全体的にたいへん参考になった。最近は電動車いすの利用者が増えているので、きちんと指導していきたい」と抱負を語った。

「電動車いす研修」の内容

1 講話

用意されたテキストに沿って、電動車いすの基本を丹念に解説。いちばん時間が割かれたのは、事故事例（イラスト）を用いた危険回避方法の説明。インストラクターは、「電動車いすは被害者だけでなく、歩道では加害者となる危険もある」と指摘し、その点もきちんと伝えるよう指導した。

2 実技（基本編）

講習員はペアを組み、指導者と受講者のロールプレイをしながら、すべての実技メニューを消化。インストラクターは、各ペアの会話に耳を傾け、「ただ『気をつけて』ではなく、何を、どのように気をつけるべきか、具体的に伝えて下さい」などと、指導法について細かくアドバイスした。

●障害物通過の体験

段差などの障害物や、起伏のある道の走行も体験。とくに危険と思われる場面では、インストラクターがデモンストレーションを行い、何がどう危険かを具体的に解説した。

3 実技（応用編）

応用編の実技では、より現実の道路に近い環境での走行を指導。道路の横断では、斜め横断すると、まっすぐ横断するのに比べ、どれだけ時間がかかるかを、実際に走行して確認するなど、さまざまなケースを体験してもらう。実際に利用者を指導する際には、「自分ですべて解説せず、相手に質問を投げかけ、考えてもらうようにしましょう」と、指導法がアドバイスされた。

●建物のなかでの危険も確認

最後に、建物のなかで、自動ドアやエレベーター、建物入口のスロープでの危険も確認。インストラクターは、「とくに建物内では、まわりの援助が大切になる」と指摘し、介護者がいる場合の位置取りも指導した。

読者の声

本紙では、2月に一部読者の皆さまに読者アンケートを実施しました。ご協力ありがとうございました。

今回は、いただいたご意見の一部をご紹介させていただきます。

SJ編集部では、皆様からいただいたご意見を参考に、今後もより良い紙面作りに努めてまいります。

●クルマをつくる会社として、具体的にどういった交通安全活動の取組みをしているのか興味があります。今後もホンダとしてい かに活動するかという点に注目していきたいと思っています。（30代・女性）

●指導する立場からの意見や記事が多いですが、指導された人の感想等、指導される立場の意見も増やしてほしい。（20代・男性）

●世の生活とどのようにリンクしているか、話を広げて展開をしてほしい。（40代・男性）

●写真入りで理解しやすい。全体に表現がかたい。生活に密着した話題も掲載していただきたい。（60代・男性）

●今後も学校現場（対生徒）に役立つ、自転車安全教育の記事を提供していただきたいと願っています。（50代・男性）

●教育最前線、各社各部署の取組みが非常に参考になっています。（60代・男性）

●交通事故に関する分析記事など統計に表れにくいデータの掲載をお願いします。（50代・女性）

ご愛読者のみなさまへ

SJに対するご意見・ご感想をお寄せください！
SJ編集部では今後の紙面づくりの参考にさせていただくため、みなさまのご意見・ご感想・ご要望を下記メールアドレスにてお待ちしております。

sj-mail@spirit.honda.co.jp

[お知らせ]

4月1日付、本田技研工業（株）安全運転普及本部本部長に大山龍寛（常務取締役）が就任。

前任者同様、より豊かなモビリティ社会の実現に向け、なお一層邁進いたします。今後ともよろしくお願い申し上げます。